

新産炭地宣言 旧産炭地6市1町が連携して

産炭地活性化事業実行委員会（空知管内6市町）

広場に大形テントの出店や色とりどりのガーデン・パラソルが、いくつも並んだ。

芦別市の「ガタタン」、歌志内市の「ナンコ鍋」、赤平市の「ガンガン鍋」。かつて空知の三大炭鉱料理と称され、いまに伝えられるドンブリや鍋料理が試食に供され、販売されている。

代表格の「ガタタン」は野菜、山菜、卵などの具をたくさん盛って、とろみのあるスープで仕立てたラーメン。

隣のテント出店には、美唄焼き鳥、夕張スイーツ、石炭ざんぎ（三笠）、歌志内漬物、上砂川しいたけなどの名産食品が並んだ。

年老いた元炭鉱マン夫妻が「ああ、これこれ」と、懐かしげに出店をのぞき歩いている。若者たちや家族連れがパラソルの椅子に腰かけ、汗を拭きふき「ガタタン」のどんぶりに挑んでいる。どこもかしこも人、人、人。ざっと2千人にも及ぶ。空知の炭鉱が全盛だった頃の賑わいが、再現された。

2009年まで毎年開催されてきた「産炭地活性化事業実行委員会」（事務局・芦別市、

大橋二郎実行委員長）主催の「賛炭フェスティバル」である。

1回目の「賛炭フェスティバル」は、2007年9月、夕張市の「石炭の歴史村」で開催された。この年の3月、深刻な財政難に陥っていた夕張市が「財政再建団体」に指定されたばかりだった。

■ 空知の青年たちが奮起

「他人事ではない」。近隣の空知旧産炭地は震撼した。当時、芦別青年会議所の理事長だった大橋二郎さんらが、空知一円の青年会議所や若手経営者、まちおこしの仲間

に「みんなで何かできないか」と呼びかけ



空知の旧産炭地仲間が勢ぞろい＝初回（2007年、夕張市）

た。芦別市の場合、1958年、7万5千人あった人口が基幹産業・炭鉱の衰退とともに激減、2005年の国勢調査では1万9千人を切っている。

「わが家は祖父の代からの炭鉱の資材調達などを請負う企業だった。下水道工事に転じ、頑張っています。まず我々が炭鉱の歴史と伝統に誇りを持つことこそ先決でしょう」。大橋さんは39歳だった。

空知（旧産炭地）の大連合というユニークな提言に、芦別市、赤平市、歌志内市、上砂川町、三笠市、夕張市で商工業など経営の青年会議所メンバーを中心に20余人が奮起した。現在の産炭地活性化事業実行委員会が結成され、メンバー一人ひとりが実行委員になった。結成したその年に開催したのが、1回目の「賛炭フェスティバル」だった。



走れ、走れ！自転車駅伝（2007年、夕張市）

「混沌とした先行きが見えない今の時代を何とか打破したい。一回り大きな視野に立ち、この空知という広域の市町村で、同じ悩みを抱える青年が空知（旧産炭地）の発展・活性化に結びつくような事業をやろう」。それぞれの地域に孤立していた人たちが、相互に連絡を取り合い、顔を合わせ、交流するようになった。

■ 気概の「新産炭地宣言」

「初回はあえて、夕張市で」と決め、アイデアを凝らした。「地域の食」ばかりでなく、上砂川から夕張に至る「自転車駅伝」「SL夕張応援号運行」「夕張太鼓」など盛りだくさんの企画が並んだ。

総合タイトルを「賛炭フェスティバル」とした。「旧産炭地」という言葉を「賛炭」と言い換えて、発想の転換を促がす狙いがあった。

そして、もう一本のタイトルは「新産炭地宣言」。空知青年たちの気概を、全道、全国に発信する意気込みだった。

翌2008年秋の2回目、新たに美唄市の仲間が加わり、今日の6市1町体制となった。会場は芦別市の上芦別公園特設会場だった。

3回目の2009年秋は、赤平市のコミュニティ広場。

■ 「この地で生きる」自主・自立の精神

毎回の開催費用はざっと 200 万円で、ビアパーティの開催などで捻出、3 分の 1 程度の道費補助を受けてきた

スタッフが口をそろえて言う。「私たちはこの地で生きている。これからもこの空知で生き続けていこうと心に決めている。明るい社会というものは決してトップダウンではなし得ない。一人からボトムアップが必要なのです。私たちは自分たちの手で、自分たちの地域の将来を真剣に考え、自身の未来を地域の未来と融合させて考えることが、本当の町づくりでしょう」。

■ 未来志向の「過去から学ぶ」

こうして迎えた四回目の 2010 年秋は、趣向を変え、産炭地体験型のバスツアー見学会などを催した。

今回も約 200 万円の費用がかかった。道費補助は同年度からなくなった。実行委員らの奔走で、北海道産炭地域振興センターが委託業務として全額補助してくれることになった。同センターは道内産炭地域の地域振興対策を支援する目的で道、自治体、企業など出資により設立された公益法人。

実行委員会メンバーの大半はいま、青年会議所を「卒業」しているが、そのまま運動を続けている。最近、イベントなどに協力する地域住民の姿が目立つようになった。それぞれの地域の元炭鉱員など、ざっ



ヘルメットをかぶって旧炭鉱施設を見学する中学生たち=2010年10月、旧住友赤平炭鉱

と 30 人。確実に運動の輪が広がっている。バスツアー見学会には元炭鉱員らがボランティアとして案内役を買って出た。

近隣の青少年やまだ炭鉱経験、記憶のある中高年、三世代の空知住民たちを満載した大型バスが、岩見沢を出発点上砂川―歌志内―赤平―芦別の巡回コースをゆっくりと回った。参加者は 800 人となった。

いまでも残る産炭地最盛期の施設・立坑櫓や石炭博物館などで疑似体験をして、先人たちの苦労を身をもって知り、同時に産業遺産としての価値を実感する機会となった。

また、これとは別に芦別の中学生約 30 人を対象に、旧住友赤平炭鉱の公開日に合せ、体験見学するバスツアーを実施した。かつて「東洋一の立坑」とうたわれた巨大炭鉱施設で、立坑などが閉山時のままほぼ完全に残されており、中学生たちの間から歓声があがった。

「空知の石炭が戦前はもちろん、戦後日本の復興に果たした大きな役割を知って、

先人たちを誇りに思えるような機会づくりを。いまさら嘆き節など口にしたくない。素晴らしい過去があって、未来も拓けてくる、と前向きに考えていこう」

実行委員会のスタッフは、体験ツアーの青少年らと語り合っていた。

前向きの姿勢で未来を切り開いた空知の企業が、現実にある。世界市場に小型ベアリングを製造・販売する（株）北日本精機（芦別）。ロケットの開発で知られる（株）植松電機（赤平）。いずれも、かつては炭鉱関連の企業だった。だからこそ、産炭地活性化事業実行委員会の「新産炭地宣言」が、空知住民の胸に素直に響く。

根気よく続けられてきた実行委員会の運動は、旧炭鉱地域住民の間に明るさと誇りを取り戻す気運をもたらした。

行政も動き出した。芦別市の場合でみると、平成 20 年に「わたしたち住民が主役のまちづくりを」と、まちづくり基本条例を施行、2010 年度からは未来志向の総合 10 年計画を進めている。

将来、取り組んでいくべき構想がある。実行委員会はいま、空知住民に呼びかけている。着実に、一歩ずつ、前進していく考え方である。

「空知の資産（施設、郷土食、新商品、活動、イベント）を統一（ブランド）化することにより、外部への販売促進の強化を

図るとともに、イベントなどの情報を共有しあうことで新たな交流人口を生み、それぞれの立場を理解し交流する中で産み出される新たな発想には多くの可能性がある」。



■ 連絡先

〒079-1371 芦別市上芦別町 105-154

（有）大橋設備工業内 賛炭フェスティバル

（産炭地活性化事業実行委員会）

TEL:0124-22-4520 / FAX:0124-22-4042

Email : oo84neniyu@sunny.ocn.ne.jp